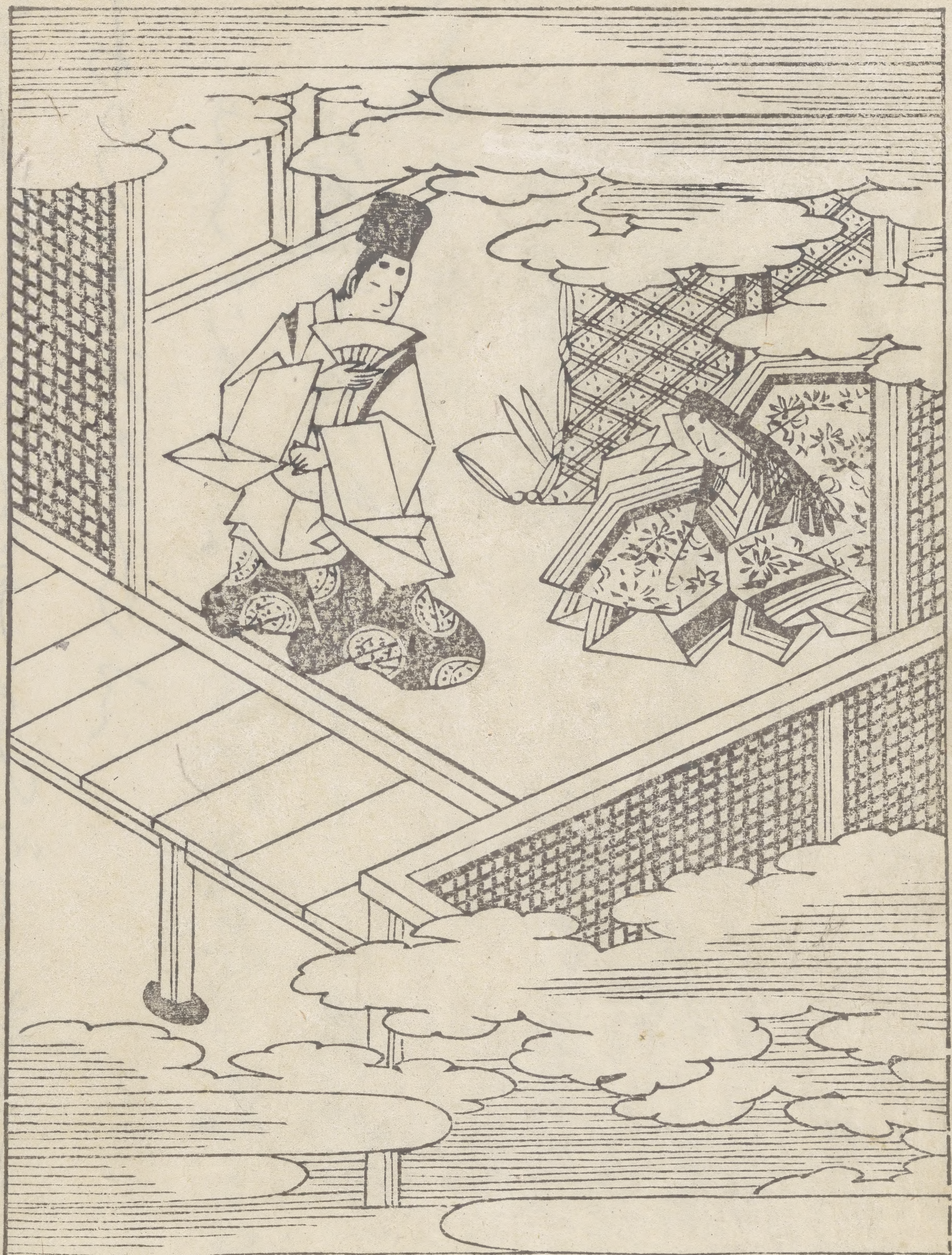
伊勢物

大阪 青山
嵯峨本
2/137 伊勢物語

むかしおとこいもうとのいとおかしげ
なるを見をりて
うらわかみねよげに見ゆるわか草を
人のむすばむことをしぞ思ふ
ときこえけり
返し
はつ草のなどめづらしきことの葉ぞ
うらなくものをおもひけるかな



昔し男ありけりうらむる人をうらみて

とりのこを十つゝ十はかさぬとも

思はぬ人を思ふものかは

といへりけれは

朝露はきえのこりてもありぬへし

たれかこの世をたのみはつへき

又男

吹風にこそのさくらはちらすとも

あなたのみかた人の心は

又女返し

ゆく水にかずかくよりもはかなきは
おもはぬ人をおもふなりけり

又をとこ

ゆく水とすぐるよはひとちる花と
いづれまててふことをきくらむ

あだくらべかたみにしける男女の
しのびありきしけることなるべし



せうし男人のと覚さいては萬うへ仏敷所
うじうんハ四よなき時やさうきらん
義こうちらめ祢さんのまめや



昔おとこありけり人のもとよりかさり
ちまきをおこせたりける返事に
あやめかり君は沼にそまとひける
我ハ野にいてゝかるそわひしき
とてきしをなんやりける
昔おとこあひかたき女にあひて物
かたりなとするほとにとりのなきけれは
いかてかはとりのなくらん人しれす
思ふこゝろハまた夜ふかきに

昔男遊ふうりし風女ありいひやわら歌
なきやらぬ妻ち悦たとふゑもにハ
一阿ま清定ふ風つ遊居をく庵ん
逢の一かとくかもひけふ風女のえこう
海しうなわて法よ有
思ひすそあわもはらめとこゝとの楽乃
なわ一しことにたえま流きの歌
せり一男にきそておもひおきそなもひく
あ海里て

わか袖はくさのいほりにあらねとも
　くるれは露のやとりなりけり
むかしおとこ人しれぬものおもひけり
つれなき人のもとに
　恋わひぬあまのかるもにやとるてふ
　我から身をもくたきつるかな
昔こゝろつきていろこのみなるおとこ
なかをかといふ所にいへつくりてをりけり
そこはとなりなりける宮はらにことも

なれ女ともこれのなかなかわくれ田かうらん
とそこの男袖か(?)我ゑそみしのすたも
のしまゐやとてかはまわていかきくれ
はこの男にけておくたかく祝ふくれは女
あさまくわかれいく世の成とふ遠
はなれけん人のまとは速も絶ぬ
かいひてこ此宮ありかはまちきあそあり
く神へおとこ
すくておひてあをたち端のう祝たかへ

てわかもおりのすたくなりかわ
とていなむいうしかわる数このみやさもほ
ひ諸げんとそひるれた
うらみひておらほほ諸ふと哉かまきハ
やまもたろうるゆりましゆらを
すかしたとこ京をいて思ひる世ねんかし
山ういまむとおもひいわて
いえねひねいまえかありと山さとに
あまかくりくきやともとのくむ

かくて猶いさゝかやみて志にいりかはくえ
えだもてよみうゝたかとさきいそく
かのうへに露をきてあまの北河
唯本まる母のひかしけくゝ
となんいひていさいそぎてあかく参
前むかしあかり宮ばかりへいうしく
心もまめなるゆかりぬ殿の津へとう志
徳あつりおもきんといふ人につきて人虎
ゝへいふ仏あこのおとこ宇佐虎ばかひ

にて宇佐乃つかひにくたりしとき乃
官人乃妻めきてなむあるときゝて女あるし
にかはらけとらせよさらすハのましとい
ひけれハかはらけとりていたしたる肴
のさかなゝりける橘をとりて
さ月まつ花たちはなのかをかけは
昔しの人乃袖乃かそする
とよみ給ひけれハおもひいてゝあまになり
て山に入りてそありける乃歌



昔おとこつくしまて行たりけるに
これはいろこのむといふすきものすた
れのうちなる人のいひけるをきゝて
そめ川をわたらん人のいかてかは
いろになるてふことのなからん

女返し

名にしおはゝあたにそあるへきたはれ嶋
なみのぬれきぬきるといふなり

むかし年ころをとつれさりける女心かし

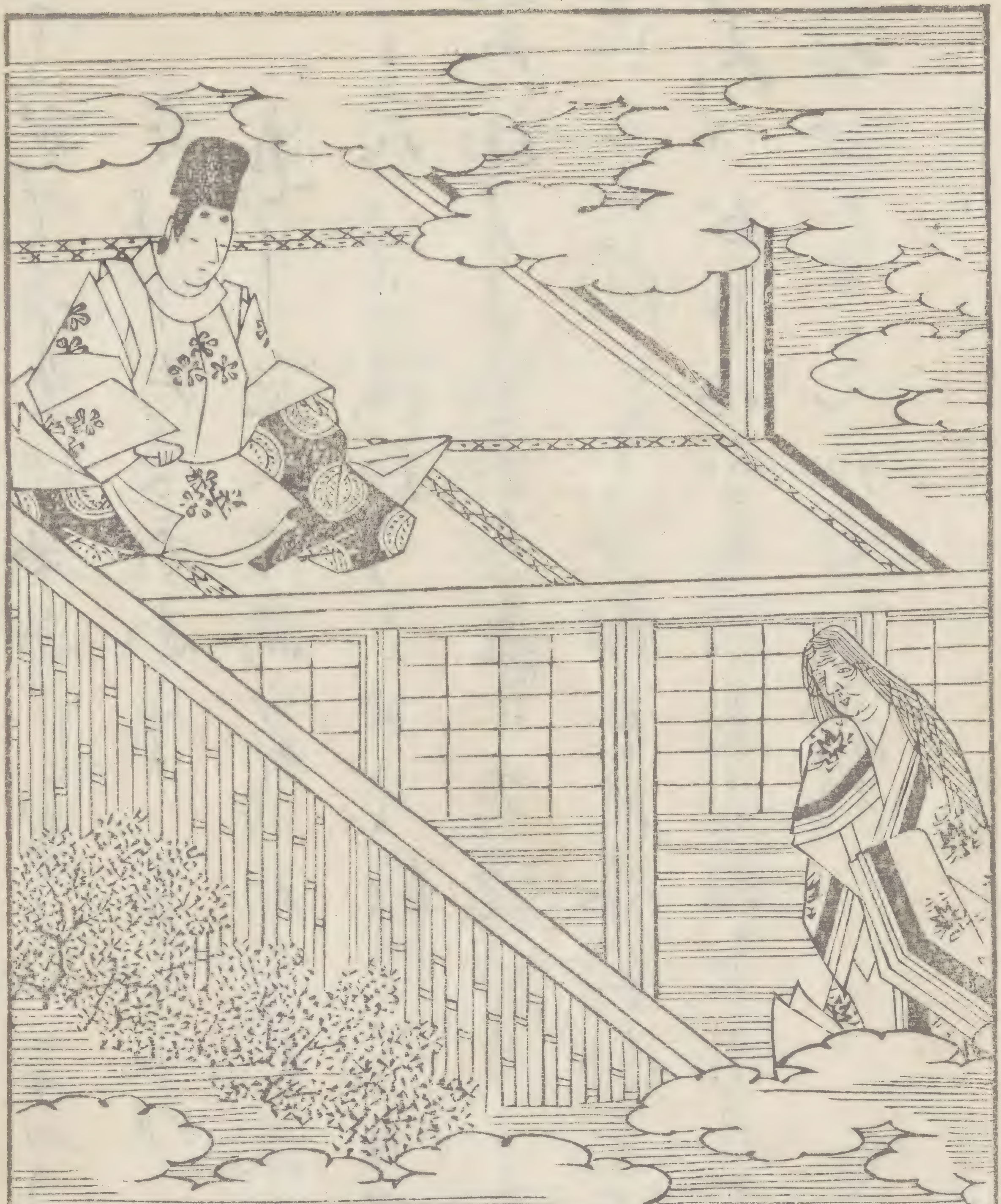
こゝやあさきわれんはかなき人のことに
ききて人のこゝろなかれる人につかまつりて
まどひし人むまへよりておもひくに
せぶとしけりよきわかこうの良き日をたま
へとめでしかひにしかばをこせたなりけわ
おとこかまをはしまうすやとて
うるしへのるほひそ波羅はゝて花
このころとなにはにかへりの那
かひりをいひえ浅のしとおもひていらへ

もちへぬたうをなといふ色もきぬと思へ
色深のこほ萬も有りめもみえれ物もいらへ
せんといふ
こ袖やら此我小あふこ機のうきはく
よし月やまとまりわりはなき
せいひてきぬゝきそとらせられとすてゝ
かけ入りなわいろちいぬらんかもまうす
思ひし世心はく數ぬいそんなさけあらむ
男入りあひきてしらなと思へやひらひ

いそむたらわもふさりまことならぬ事
かさねをれ子三人をならひてうさわ有り
婦さりのこハあさけなくいらへてやこぬ
さらふるふなわ南くの子をせよ絶れぬとこう
いそこんとあハ仏ゆ有りこ我ぬくしき
味ひよりしこと人をいふてなさるあしいのて
これ五十中ねよあり物てしかゆと思ふ
心ありかわしあやきけりけさ於ひ
てこらもらのそむ丸まれくちをとわてかうく

なんおもふといひ乃神はあさ迄かわて
あそ孫まゝわさえのち男みえさわ乃神は
ぬむとこ乃いゑまいさてかいま見乃数を
おとこほ乃り有り見て
こもと影に一とせさらぬつゐもゑん
わか哉こゝあらしおもひけり見ゆ
とていそたつけ志きまゐらせりかう
から有りかうわていゑま草うらふせわ
おさゝ寸かの女乃せしやう有り志乃ひて

てりてみれハ女なけきてぬとて
さむしろに衣かたしきこよひもや
恋しき人にあはてのみねん
とよみけるをおとこあはれと思ひてその
夜ハねにけり世中乃例として思ふ
をハおもひおもはぬをハおもはぬ物をこ
乃人ハおもふをもおもはぬをもけちめみ
せぬ心なんありける



昔おとこみやうにおかしう小王きもせ侍り
けり神へいたくなわけせあやしきおよめる
同風入りかの男をふきはなれにき
ひまもとめ侍ていふへきかよし以

返し

とわとえぬ風はありともむすぶまじ
たゞあさきうひ海もとせへき

むかしおほやけおほしてつかうたまふ
女のとゆるされたるあり大里おほえやれ

大所とていますかりけるいとこなりけり
殿上にさふらひけるありはらなりける
をとこのまたいとわかゝりけるをこの女
あひしりたりけり男女かたゆるされ
たりけれは女のある所にきてむかひをりけれ
は女いとかたはなり身もほろひなん
かくなせそといひけれは
思ふにはしのふることそまけにける
あふにしかへはさもあらはあれ

とりあへてはうしよおわたまへひいさい
のこのみきうしよむ人あなりをもしりて
みちおわぬくひこの女おもひまひてるへ
ゆくさきはなかりのまきことゝおもひて
いはひかすひくれはこれ人きてわたしけ
りつとゝめとゝめもはるそのこふふくはえ
とわてたくすふけいきてのほわぬかと
かさはよしゆくありま風にこもいさ
はうふなわぬへくまへはあてほはひぬ

あしとそこ所おせきこいてりありと世かの
かくぶんはしめ給へ此やとは神とも申し
れといふやまさわり乃ことおわし侍ゝなを
わ里なくあはしう乃ことたわしの神へおん
あうしりむなきよひてこいせ志といふ
いつあのくしそなんいきの都りへ
のるまく月いとくかあしきしとかれ
ましわて河りしわれ月こらし
くのみおわしの神へ

急せしと思ふらし川よせ志こうき

神ゑうれともなわ月　作歌乃那

悦とひてを舞いり　作歌



この児をとらはほかのちちよくなるべし
海してかとけのはなはなはんりきては
こ恵をいやしさうとくて中紗ふをきて
女はゆすうあまりかくはきえよはかう
まつりてすくせはさなくりあしきこと
のむところありほたはまてとそなんたれ
いろかあはとたみかときこしめしつけて
これは男まはなりしつりていけい
この女のわしこの宮は家女をはまかてさ

おもてうらにこめてしほりつけられたる
くらうつりし事も見えなく
あまのかるもに住虫乃われからと
ねをこそなかめ世をハうらみし
となかよをまたハこれおとこなる人乃心よわ
きことわりきこえふえをいとおしく候
きこえこそハおりしうてあまたれけり
うひあふかへまたハこの女もうらにこめ
おうられけるあなたとハまえとなひ

見るへきにもあらてなむありける
さりともと思ふらんこそかなしけれ
あるにもあらぬ身をしらすして
と思ひをり男は女しあはねはかくしあり
きつゝ人のくにゝありきてかくうたふ
いたつらにゆきては来ぬるものゆへに
見まくほしさにいさなはれつゝ
水のおの御時なるへしおほみやすん所も
そめとのゝきさきなり五条のきさきとも

昔おとこ清の色にてし流所に何里候るに
ありけりおやとも御ならひたみてなり
まのかたに有いきけるわなきをみまとえ無
ともの何る銭見て
なふはつをけきこうこ津のうつことに
こ銭やこのゝ銭うこわたるふ銭
こまをあつまりて人くりつわにける
昔おとこ物うえうしにおふとらひ
つねて清見のくにへきさうなりけり

いさゝかうちのく月いこ夜深山縦
見えたくもかこえれ見立井ゆくもやま
すあしさよわたる里て日夕さ迄よむ
悪いやしろう木の寸志月ゆかなき
うまきそ見そかのゆく日と乃なゝ月して
ほとわしみえ久々乱

きみ乃子浅子雲深からまひかく評ふそ
花代ひやし梁守しこたなわりわ



むかしをとこいつみのくにへいきけり
すみよしのこほりすみよしのさとすみよし
のはまをゆくにいとおもしろけれはおり
ゐつゝゆくある人すみよしのはまとよ
めといふ
かりなきて菊のはなさく秋はあれと
春のうみへにすみよしのはま
とよめりけれはみな人々よますなり
にけり



昔おとこありけりそのおとこ伊勢のくにゝ
かりの使にいきけるにかのいせの
斎宮なりける人のおやつねのつかひ
よりはこの人よくいたはれといひやれり
ければおやの事なりければいとねん
ごろにいたはりけりあしたにはかりに
いだしたてゝやりゆふさりはかへりつゝ
そこにこさせけりかくてねんごろにいた
づきけり二日といふ夜おとこわれてあ

りんといふ女もまたありしとも思へ侍る
きこえやひとめしけれはえあへれ侍りし
さゆとゆる人あれはとりくも風とさみ女
乃旅やみちのくあるひは女人ありし侍
めそてね日とつりわ有りおとこし乃もとり
きこわゝわ男あたまろまさわくまはとの
うたを見いふしてふさなゝ有のお浮
ろふ流にちいさきあろは似さきふもつて
人たて里男いとう飛しくてわのめる所

ゐていりて子ひとつよりうしみつ
まてあるにまたなにこともかたらはぬに
かへりにけりをとこいとかなしくてねす
なりにけりつとめていふかしけれとわか
人をやるへきにしあらねはいと心もと
なくてまちをれはあけはなれてしはし
あるに女のもとよりことははなくて
君やこし我やゆきけんおもほえす
ゆめかうつゝかねてかさめてか

おとこはいといたうなきてよめる

かきくらす心のやみにまどひにき

夢うつゝとはこよひさだめよ（一説に人）

とよみてやりてかりにいでぬ野にありけ

ど心はそらにてこよひだに人しづめ

ていととくあはんと思ふに国のかみいつ

きの宮のかみかけたるかりのつかひありと

きゝて夜ひと夜さけのみしければも

はらあひこともえせであけばをはりの國

爲からなん也はきハかとこも人志けは
ちの隙をなさせとえ〻のりは和歌う〱
あれた舞とはくかと有りめうたよわ
りさすさとのはきのさう不うる𛀁うて
りうしうわとわてみきハ
かち人のわるもの脱とぬきめえるし〻出
恥かしあそし次悪ハあしうおはりはきのさう
有りつ外まで此にみしてうるおす
悪をうよ隙く

両ニあふさかはせきこえし方舞
とてあくれハおりまのくまへこし月
々わ哥宮を小濃おはしと歳文徳天皇の時
めゝ神たかのみくこ乃伊もうと



むかしおとこかはのたひよりかつわた
ききまありしおほよとのわたりやとも
てつゝきのこゝやみわたりくうりひけ
くまれ

れんちめう宮やしらさうきほとして
やまよ城しぬよあをのつゆ女
世しおとゝい物け神宮に内乃河つひ
まてまいり神へかのこゝやまはあてゝ
といひけるをせんかたくしことまて

ちはやふる神乃いかきもこえぬへし
おほみや人の見まくほしさに

おとこ

恋しくはきても見よかしちはやふる
神の伊さむ流みちならなくに



昔おとこいせのくになりける女又えあ
はてとなりのくにへいくとていみしう
うらみけれは女
おほよとの松はつらくもあらなくに
うらみてのみもかへるなみかな
昔おとこ人ありときゝてせうそこをた
にいふへくもあらぬ女のあたりを思ひける
めには見て手にはとられぬ月のうちの
かつらのことき君にそありける

昔おとこ女をいたううらみて
岩ねふみかさなる山にあらねとも
あはぬ日おほくこひわたるかな
昔おとこいせの國にゐていきて
あらんといひけれは女
おほよとの濱におふてふみるからに
こゝろはなきぬかたらはねとも
といひてましてつれなかりけれはおとこ
袖ぬれてあまのかりほすわたつ海の

一　こゝろなハのみすゑやまむとやいふ

め

岩まよりわたつみ留めし清きなくハ

志ほひしほみちかへもありなせ

み

おとゝ

なかんたまそぬ遠清く志か流世乃人家

ゆくき心ハうきのしほくか

世乃りやまつりかゝき女りなのん

鳥のし三条乃たゑきれまる春宮清みやす

むかしとやらんいふとき民部卿まうでて詠
あまた小式部内侍にこよひは歌おき
あ人くのなくたまつぞ有車
よわたまえめてすらてたてまつる歌
おほはらやをしほの山もけふこそハ
神世のこともおもひいつ覧
とそいひしもかなしとやおもひけるかく
おもひれんしすかし
せりし田むらのみりとくやしはこかでお

りしまし宗かうみ時藤出に大かき
ことやーすゐまうかりをうれう時行て
安祥するうのそて見玉ちしゐか人くさてけ
桜たてまつりけるをみてあはれめする桜
ちさてけりわに何里うこりくのとこけるの
桜木乃枝折りてたうのまへにそて
さしは山もさうふうのまへ折うこき
そへさ風やう折なんみえる歌書述き
右大将よいまうかりけ歌ちりしのつ手

ゆふとやすい海うかわてかすの浪り浦
わとにうさよむ人くを見し也はめて
ゆゑ乃こわきを題入りて歌乃いまえ也り
うつて菩薩摩訶薩乃世海濃う見なる
ゆるおよふめハたうひふりう見ゆ歌

山のこ雨う津里てけ小ふ河ふすハ
本流乃ちのれをとぬと雨ゆ恵し
雲のこゑうわけ有をいまみ喜ことくもあり
浦わゆ里そ於う見ハこ神やまやわれん

あつまりけり
昔したのきこえ申も女房なりし海
しんかう詣行ひてなく限ぬ哀れ見かき
安祥寺にてしんかの右大将からりしの
つ孫なきといふ人海うかんかう見
王さにまうで行ひてかへさ入山しふ乃
を覚しのみこなりまゐりや海さふ
乃宮にたきおとしはしりせ限とまいて
なりし初くはへりまゐ風にまうで行うて

年ごろ詠よみ有りは清かう素性法師とちの
くいは書き清かりまつるとこゝにはこく
有りせよまるりんとやしたまふ見こまる
こひ給ひてころのたまし乃まうけせは
聴たまふはたりかの大ねいくをも
かわ行ふ座う宮つゝへのりめりこと
きをやはあうへき三宗源たほ見歎よせし
時紀氏くにの千里乃はゝ有りあわりる
いとたゆ詠さいしこるまつまりきほ見

さよのくらたてまつ遣里しかはけるる人
あさきうしのまへのえみ有りけんあ
し城志下この見たまふきこなわこゐ
いきをそてまつらんとの雅てこすい志ん
と旅里してとわりつりいはくりく
もなくてもてきぬこおいしきし
よわはえりいまき神里こ被城てまたく
まつりいすゝろなる庵しとそ人く
にうるよ海さふまふ君のむまれのえふわ

花の人乃然なんあをきゝけをきゝ見て
まよゐのかうりこゝのうゝ然つけてたて
まつりける
あつまや若ふうかふ流いう時みえぬ
こゝろをこゝせんよしのふに待へ
りたなまゐりける



むしうちのなかに見こうまゐたまつる
りはうふやう人くうしゐしわか
おほちかさなわの數かよふのよ者
わの門小ちひ移め谷のけをうへて六
あれ小ゆきりかく神さるへ家り
こ神は侍るかひのみことゑの人中將藤
ことなせいひける所よ乃中納言ゆよひ
乃むすめのりしなわ

むかし松やろへ入風伊人けもちの花
うへ入る山と共に色々のはこもわ
けふなる日あめ降るほとり人なもとへ
おわてそこまでしすとてつかはす
ぬれ候ふうちあひておほつ前年の内に
え取ハいくつもありしとおもへは



せめし大乃木あいまうちきこえし海うちわ
くわかも河那ほとわか小大宗まてわよ家を
いはしたもし河くにくわてしみ給ひくわ神
な月のつきも里うた菊乃花う流ろひさう
里な成に五条のちゝさま見舞るた里見こし
たちたりしまき我えよひ把我さけ乃こと之
おそひ事物あけもそゆくかとふこゝの中乃
のたもし河お我ほむ流うるすむうこよあ
里くるかさ井おきふたりしき礼きてさまは

ひありきて人にこゝろよませえてこゝろみる
しかうはよいつかきたけんあそこなたよ
つかはしつゝいてこゝりよ經なり
きなむよみん歌こものくにてゐきさわけ
なにあやしくおもへたところくおほ
かきのわかの兄かや六十よ國のなりよき
ほりまでいふ所にてたつ所ふみわかわき
まはなきかのおきふさうふこてをめつゝ
しはかはよいはり地にけんせよみわの歌



せうしこ秋たか乃みこと申すみこれハ
志ゆしけるを山さとのあふたりこ服せ
とりふ少さこ後小室ゆりけり年ことのさ
くらの花さかりにはみやへうけ宮へなせおり
ましける歌うたの時見きのむまれうかわ
ける人をつ孫ゆりかそておはしましけるわ
とたらへて久志くなわまける神へうけ人居
名わか飛月けるわうりハ詠むこ後みも
きてさけを乃ここの見ゆくや海とうしり

かゝれりけり今かりするかたのゝなきさ
乃いへその院の桜ことにおもしろし
その木乃もとにおりゐてえたをおりて
かさしにさしてかみなかしもみな哥よみ
けるうまのかみなりける人のよめる
世中にたえてさくらのなかりせは
春乃心ハのとけからまし
となんよみたりける又人のうた
ちれはこそいとゝさくらハめてたけれ

う紀世有りなかりしきしりう へ家り
とそうの本乃もとハさらてかへ風有り日
く神有りなわぬ流ともふう人さらけをもさ
お免野りよわいそきたわこれさらえ哉乃こ
了世とそくよ紀部哉もと免ゆくまあ海の
かよへといふ部有りいうわぬ君こにむまれ
うゑおほこまて以海みこれのたまひけう
かさのをかわて一阿まのかは乃陽とわに以
うる哉たいえりてうしよ免へさう侍まえ

きせとのゝもまうけ候はゝおむきまいらせ候よ
見つくしたてまつり候歟
かやくししるしおきたらめよ為ゆへ
お梅乃りりうり与はきくのか
みこゝろばせゝすし給ふその底し
ゑきてこまりにきまいらせあつまれとも有
はかりまはるまうれり也し
一と筋にひとつひきまはしき見まいらせ候ハ
やさかしき人もゆかしとそおもふ



かつて宮月いつる鏡るめ玉のひぬよみて候
まほさけ乃こゝろのうわしれあるしの
みこゝろえいてつる新ひなりとす十一日除
月もかく袖なれと涙ハかのむまれ乃見
乃よみ候

わりなくに雨さへあまも月のかくさか
山のはにいそいさすもあらふん
みこふりハ里たてまつわてまれありつゝ
なきふつてみしもたいろになわらん

やまのえなくハ月もいらし哉
むかしハ御せよかすひ候ひしハ神たちの
みこれいの手わし月おりしまれやすも
にう海みか見なるほよふつかうまつ壹
ほこ跡へて宮月ゝいわ沙うなわれ寔
ふわしてとくいな舞ゝ花林をわにおほみ
きふゐまひ試くたまいんとて後ゝえさゆわ
ふわこらのむまのえへもとなうわて
海らとてくせひき時を歩ふともせま

一かよ乃狼とたつりゐのまゝなくよ
せよ見ゐるとたゝやすひ乃ほこもわたる
峯わた見こおほとのおもふてかり行てけ
里みくし流ゝまうてつかう東流里ゐ風
をおもひのほり行くしおほし
たかうそゝ名里む月よおり見そゝまつりん
とをのにまうてゝ風有ひえの山乃嶺
もとみれハ雲ゐとたりしましそゝ見ける
に海うつゝおりみえそゝまつるよ流ゝく

どいひてもものあしくてたけしまし乃神八
庭にひきしくさふひていりし庭
乃ことなとたものひゆへきこ御りさん
もちふつひてしかなと思へとたほや
はことくもあわりまたえさふらひゆふ
く我有しかへりとそ
われまそハ夢のとう思ふかものひなや
雲ゐ見りてきこ御見んとは
ゆて大家聞く　きうし御前



昔おとこありけり身はいやしなからはゝ
なむ宮なりけるそのはゝなかをかといふ
所にすみ給けり子は京に宮つかへし
けれはまうつとしけれとしはしはえ
まうてすひとつ子にさへありけれはいと
かなしうし給けりさるにしはすはかり
にとみのことゝて御ふみありおとろきて
見れは哥あり

おいぬれはさらぬ別のありといへは

いよ／＼見まくほしき君か那
かの子ほうちはまてよみ給
世中はさらぬわかれのなくもか那
ちよもといのる日と乃こ乃ため
むかしおとこありけるはよわ清かう
まつ里乃るきこえ流くせ於諸しなうて
人を乱月にはかなうれまうてとわたりや
けの宮清かへし人神へつ神月しい
えまうてすきともよ心すりし子りそ

はうてゝ久成不なきありの數せし給かう
ぶらわし人うく成にせんしなにありさ
まいりありてまゐりてむ月なきなしとたら
とておほ見きたまひ常ありゆまこしあれか
ことわりてはしもはりや海まいれはや
思ひて雲ありしわこめしまゐりといふ
本題にてうるありの里
思へと我身を志らねは霞の花さかぬ
松きのつもうかのこゝろ有

とよめりけ神ハみこゝろをいさゝかあハれきか
里行うて清うぬきそたまつりけり
其のちそのきたところのきぬをあひ
いつはりはなのくおやきは神ハ清ゝ
見ていひさしてやゝにはり年ゝ経へて
ぬのもとに名をいさしハたさんとや思
けんおとこうら絶すかへてやま里けり
今までよわれまどめ人ハ色あもあらし
なのめかさまく年乃へぬまて

とてやみにけりおとこも女もあひはな
れぬ宮つかへになむいでにける
むかしおとこ津の国むはらのこほりあし
屋のさとにしるよしゝていきてすみけ
りむかしのうたに
葦のやのなだのしほやきいとまなみ
つけのをくしもさゝすきにけり
とよみけるそこのさとをよみけるこゝ
をなんあしや灘とはいひけるこの

はとゝなる宮ほかへしくまいらせ候
るよわ有りてゑうのはけともおほ下里
地にまわゝ屋男のうちみんもゑふのかゝん
なわゝゆうおいゑのまへの御落陽とわ小
あうひ阿里まそしゝこの山のかみにおわ
といふぬのひきのたきみえ有り此ほのんと
いひてのおわてみえけようのたゑものおわ
ことなわなかさ三十丈ひろさ五丈よりうわ
あうゝしのおもて有り志うきゑにつゝへ候

はゝ見羅ん屋うになんなりけるまゝ
たきのみにわ羅うみ和哥きゝしれ
さしそゝたりいしあわろみ问志の
うへ有はし里かなれ見殊うかりし
らめのれほ能もありてこほ生おつうこ
たり人にこ那たれしうたらま寸飛のゐふ
乃りこゝまつゝむ

我世をはゝふか安須ことまつかひの
ふえたのさまと佐祢たかれん

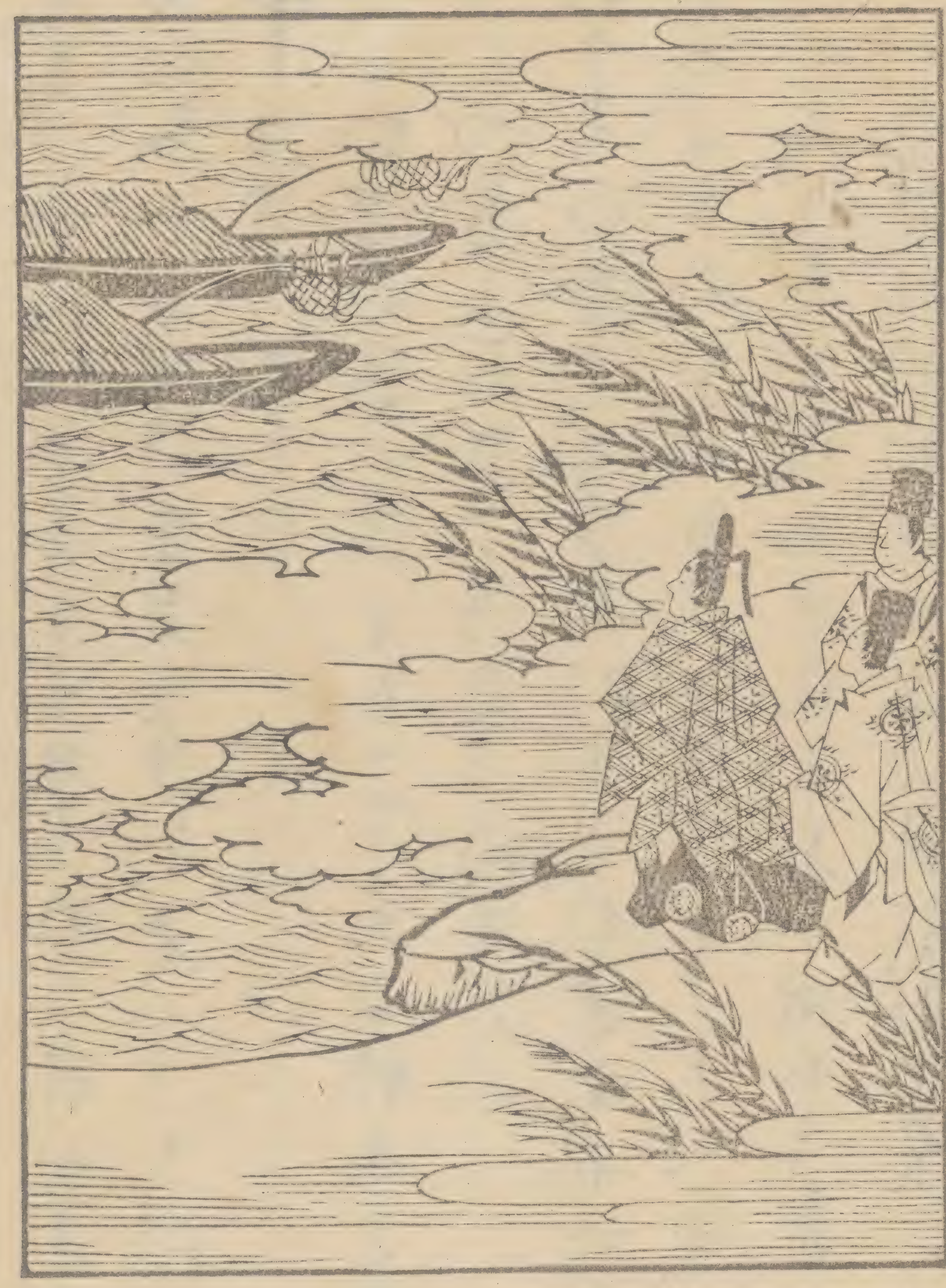
あそし雪けりよも
ぬきえたる人こそうけつらしきもの
またなくもちなか袖落せなさけ
いよあめける神へのたへの人わふことに
やあはれんこそうるにめそゝやこよなか



かへりきさちと我くてう物かし雲霞へ
もちよしか家藤博士く帰りし日く我
ぬやとわのうたをこそやまハ一阿まるわ
いく次おほく見るありうれ阿すしの
おとこよむ

はるく親藤博士かへりのかえ底かも
わりいひつたのお海乃たく次か
やよめそいゑりつつあぬらね親こそ
みの国ぬきそなへいとたゝしつとめて

うみいゑ乃兎のこやもりそゝぐ紀ら風の
なミにらせう秋ら風ひろひてい恵のうら
まもてきぬぬかさらわう法兄かたり法
きにもわてのしはまたほひていとしたな
しまうりかけり
わたら海の浪小さみといえふかく
きこえかた兎まへおし海き里けり
非なりひと乃うきなりてにあやまり
やたらすや



せわしいとわきまへぬ秋の夜と
もたちとも我ままで月を見てうれし
仲月ほうわ
おぼろかさい月をもめて志ゝ袖そこ乃
つもまんひと乃光と照らすの
むりしいやしうぬおとこやまわハま
さわるる人をおもひけてとしへ去う
人しまんわき恋しふいあちきなく
ほれの袖乃ふよ名おぼろを覚

せうし流さなき人をいそとおもひおもひ
の神人は達とやおもひの人は羅免あに
もれうし有てさといつわる事ゆゑ
なくうさ志てみうさかりしうかの神人
おもし話かわの歎桜有りつけ涙
　さくら花のみこうかくもよほしと哉
　あふたのこかさあ次落よのこと
やいふいりくも安る庵し
あり月日のゆくをさく為けくおとこ

三月つこもりかた有り
に志めとも恋深かりのめよ乃はれ
ゆふくまにさへなわまゐる那り
萬恋しきに花流るかくれと女に契り
うこゝなたにさ契てよゑる
あしへこゝろさなくゝ志にあいくうらみ
桜きかへ両雅ん両人もなゑん
世のしおとこ月ハ明南くて明とまなみ
人仮おもひうけたゝ恋われこしさりゝ

ぬへかりきとはにやあはれみしてをもひ
おきえたもひさかひてよみ給
あふふく思ひハすへてふうへなく
たまさいなしき道かわるわ
すりしもかゝることハ世のことわり
やありけん

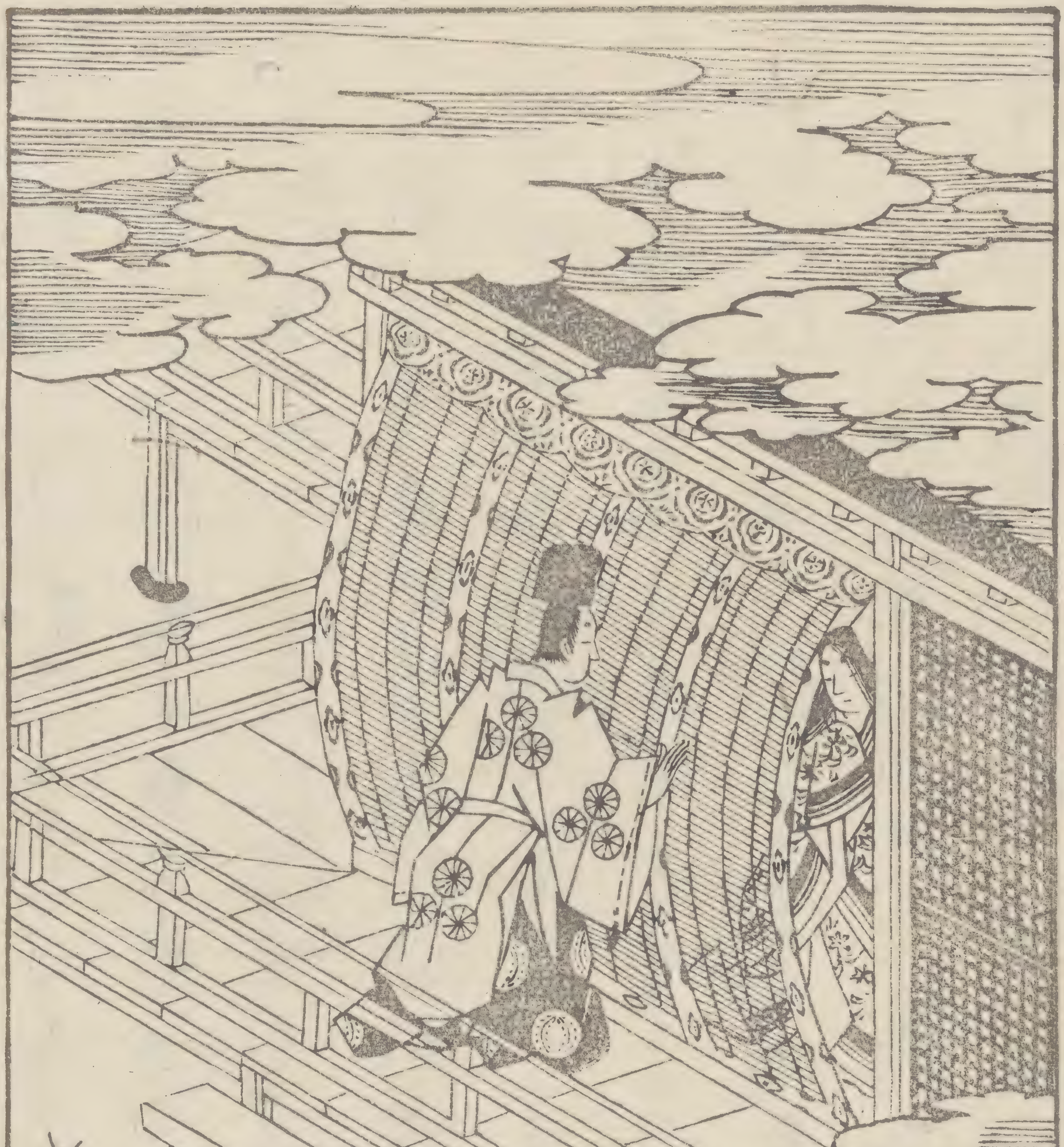


昔おとこありけりいかゞありけむそのおと
こすまずなりにけりのちにおとこありけ
れど子あるなかなりければこまかに
こそあらねどときどきものいひをこせ
けり女かたにゑかく人なりければかき
にやれりけるをいまのおとこのもの
すとてひと日ふつかをこせざりけりかの
おとこいとつらくおのがきこゆること
をいまゝでたまはねばことわりとおもへ

とかを人をはうらみつへき物かなとあり
の歌とそろうきてよろてや飛里の歌時ハ
何よ有なんおわか歌

秋落穂そ春日ハいうことのあれや
かはり見よあわやちへまきるらん
此花葉よめかの歌をせん所返し
ちゝのあきはやゝつ乃葉よむかはへめや
もみちも花もとまりこそちれ
廿一二葉落花さき有つかうまつる男

あるなかめのはかりまつるをつねありそ
かりしてよりひもすからわかえりてこゝこし
ありたいえんしておほつりはくかもゝ入
はあきこえすこしりかなむとりひ
ゝ我八女いつし志のひてもおこし了
あひよゝわものりうわなをしてたとこ
ひこほ志よこひいまさわぬ多海の河
亀たら河蜉蝣いきりやめてよ
こゝうるにきつゝいひありけり



菊たとへきなり女能也あくいふこと月日
庵にまかりて来まし給ひねは心を通とや
思ひんやまく給ひとさなりかゝ給
之頃月乃もありふかなかた女男にあさ
ひとつふたろそきなりを女いひをこせ
たりし後ハ頃なりのゝもまし男ゆりさも
おと情女たちそゝなと戴もいと要在志
ひこし給花風好ならなむ時かなし頃
ありせといひなあきまつこ給を見に

こゝろしこよわらぬ人のもとへいなせは
なわよそくせちいてたに車ゆかれ達八
女比器うとまへりにむか庵ふきたわさ
まほこの女かえてのゆゑあらをひろは
そそうはしめへもかきはりて成こせされ
あまりけていひしふうもあるなくよ
本意のわきてえなこうあわけれ
悦びきをきてりしこまわ人はこきにこ秋
なやまとそいぬさそ尾りぬのちは外に

ゆふまくれしらすゝくてやならんあし
くてやあらむつりし所もさらすかの
むかしハなきのさとのてまうちてなんせ
ろひをうなあせくつけきことひとの詠
ひこえたふ初月やあらんたそかぬ
もあ不りやあらんいまこうハゑめとう
いふ昨る
ある年かはのおほいまうちき君とやらい
備うかわかわ四十行賀九宗藤家まつせら

袖の露日中はなほも乾かなふ
待ちて花ちわりひともれ見ゆくの
こむといふふりた海かふかり
むかしおほきおほいまうち君ときこゆる
おはしけりつかうまつる男なかつきはかり
に梅の造り枝に雉をつけて
たてまつるとて
わかたのむ君かためにとおる花は
ときしもわかぬものにそありける

やよひもたてまつりにけはひのりこ
くなりしかはきこえつゝ月つゆくた
はつかなき



あそびしおとゝ君をの宮腹はかわ乃白无
かひありてたかり車にのせかへの
きこえさすまゝにわほとりゝ小みえし神八中将
なわ乃乃おとゝ乃ましてやかく歎
こすもゆかしみえもさぬ人の思ふくい
いやなくりよやなのめくしきむ

返し

ちぎりしぬなかのあやめくれきそめりし
わもひのことうし流へなわくさ

のち先達也し里有けり
首打しく後藤殿源之さまをわすれ候ハ
思漏やむことなく日ころの本懐とけられわれ
はるくき候しのふくとやいふとて
いさき世新つかへ神へたまゐて
われ東学打ふ風野へとはなれ羅兎叱
こりしのふなれはもたの海人
すりしき無備猪なかるあかりつのゆゑ
ひろといふあやくわちおん人隠家入すまき

きけりわときてうへにはるしる歌を右中弁
みちりしのまきちのといふをなを花園う
ときねのそうみ日いあまりまうくした
里あるなをけある人にその見りえたを
きせわうの花のなりにあやしきみちの花
ありける里えふ乃しふひ三人出すりのわなむ
まけ歌よきをるいりてよもしめへりそう
たえりしはるしのりしかゝふ流はるしき
なまふとあそてきうわけ非いとうへそよ

海せんりうとよりかうらおこといふ志つゝさか
りはへすまひりれと志おくゝまねりけん
りく本尊
さくは春乃志つさふかく嵩て人ならこ
安わ志月ま本ゟをちはけかも
なとりくしもゝせむけひは逢へなほき
杉ゆゝ乃恵い花のさかりに思まそうわて
藤氏藤ことにきりゆり城さ日てよめると
なせいひりはかこれ人うしつ浪ふわにりわ



昔おとこありけり哥はよまさりけれと世
乃なかを思ひしりたりけりあてなる女の
あまになりて世中を思ひうむして京
にもあらすはるかなる山さとにすみけり
もとしそくなりけれはよみてやりける
そむくとて雲にはのらぬ物なれと
世のうきことそよそになるてふ
となんいひやりける斎宮乃みやなり
昔おとこありけりいとまめにしち

ようようて河に明て心ふかわりかふかくも
落えりしとうりなむ流かりまろわりかいあ
やまわ庭しうかれんみゝよらのつひ給
久敷人様あひいへわりかさそ
ねぬる袖の袂をはりなきまとろめハ
いやえう形みもなわ福さるゝ那
火をなんよ見そやわり敷さ流うる此さた
あけはよ
むりしうたりて明くれ二河まの小ふれ除

人の寒かへらちを安し大道と捨や
ゆうし平わく世かもの下わ見ゆいへか
く成を於とこうさよ見えてや身
よ我うみのあはとし人をこ成かこに
めくりせよともたのまはこの郷
こ神八郡宮乃との見よまのひ給る車有
かくあきこえうわれ神八見ちしてかつう
たゆひ有りりわと於舞
せのしわとこうくてはしぬ身しといひ

やわらきの神ハ女
志ら露ハけふえのなくむきえすとて
あ月ぬくへ寄人もあらし哉
此ハつかの神ハいらとふめしと思ひのきと
ゐさしをいやまさらわけり
あめの杉とくみこたちの哥うえう志
詠う頃有りまうてゝ立田川深ほとわまゝ
ちはやふる神代もきかす竜たつさかは
からくれなゐに水くゝるとは



昔あてなるをとこありけりその男のもと
なりける人を内記にありける藤原の
としゆきといふ人よばひけりされど
またわかければ文もをさ〳〵し
からずことばもいひしらずいはんやうた
よまざりければかのあるじなる人あんを
かきてかゝせてやりけりめでまどひて
めはされをとこのよめる
つれ〴〵のながめにまさるなみだ川

袖乃こひちてあふよしもなし

ぬしまいのたとこぬ有きりわて

あき見こう袖ハひつうめなかん之河

君さへふかきまいはたのまん

せいつわれ様たとこいと須うめてく

いまいてまきそふきこ有いまそおわと

なをいふたれとくかえをこ猶たわえて

徒孫こそなわれ色あ児のかわぬへき有し

なれこれ保とひ侍り君侍いりひやう登

この雨はふりしといへゆまなみだ川涙男
女にかはりてよみてやらす
かすくに思ひおもはすとひかたみ
身をしる雨はふりそまされる
とよみてやれりけれはみのもかさもとり
あへてしとゝにぬれてまとひきにけり
世し女人の心をうつして
風ふけはとはになみこす岩なれや
わかの衣手乃かはくときなき

とつ給のことゝもありいひつたへまて
たひも給たとゝ
よめことにうきなのあまた聞ゆれは
わこうまゝあめるふ羅給呪
むかしおとことものゝ人妻しふ
へ給かもとにやりける
花よりも人こそあさになりにけれ
いつまでさきかこひんとかみし
昔おとこみうたにつりふ女あやしかれ

かもとよりこよひ夢になん見えたまひ
はつといひけれは男

思ひあまりいてにし玉のあるならん
夜ふかく見えはたまむすひせよ

むかしおとこやむことなき女のもとに
なくなりにけるをとふらふやうにて
いひやりける

いにしへハありもやしけむ今そしる
またみぬ人をこふるものとは

[illegible]し ―

志をひもの遠雲ほりもせけなくに

つたるかことえこひす乃流へき

み[illegible]し ―

急志とハきこえもいはし志たひもよ

のぼれんを人いうれと志らな舞し

[illegible]りしかきこねんこ流月いひちあわ

久りぬのことをまにかわふ久神人

をまれお由乃志ほや櫻風をいさこ

おもえぬかたに小たなひきいりにわ
越し たとへやもめりてみえ
なりゝゝぬいのちのかとに忌はゝい
いつにえしかきは承羅ん
昔仁木落泪かと袖り川原りかうし
新なる時いまハ由原ことう無ふく思名達
すまと慎きにあつことふれをおほさかのや
たかりひまゑ七ゑつ袖ゆまひ名承すわ
亦わあめのたもとにつきつけ名敷

おほなきひ人はとりあへずかはこにも
ゑふりのわとうたつもなくはな
おほやけのいくしきあしうりいりをの
からうひはおもひいはとわのかくぬ人見
あくおひいわとや
せうしうちうくふにてたとく女はうへいり
たとこ事こへいなんといふことおいと
うれしうてむまにのせあせけなたふを覚と
てたきにけれ事うしまといふ所のてとらけ

のまなへよみ侍

にきれのそ日数やくよわるりし侍

こやこしまくのかのれなわりか

首おとこすくろまみそら乃くたまてまもひ

いかりけわ京に思ふ人まいひやす

なくとまにらわ見ゆること海濃えま思

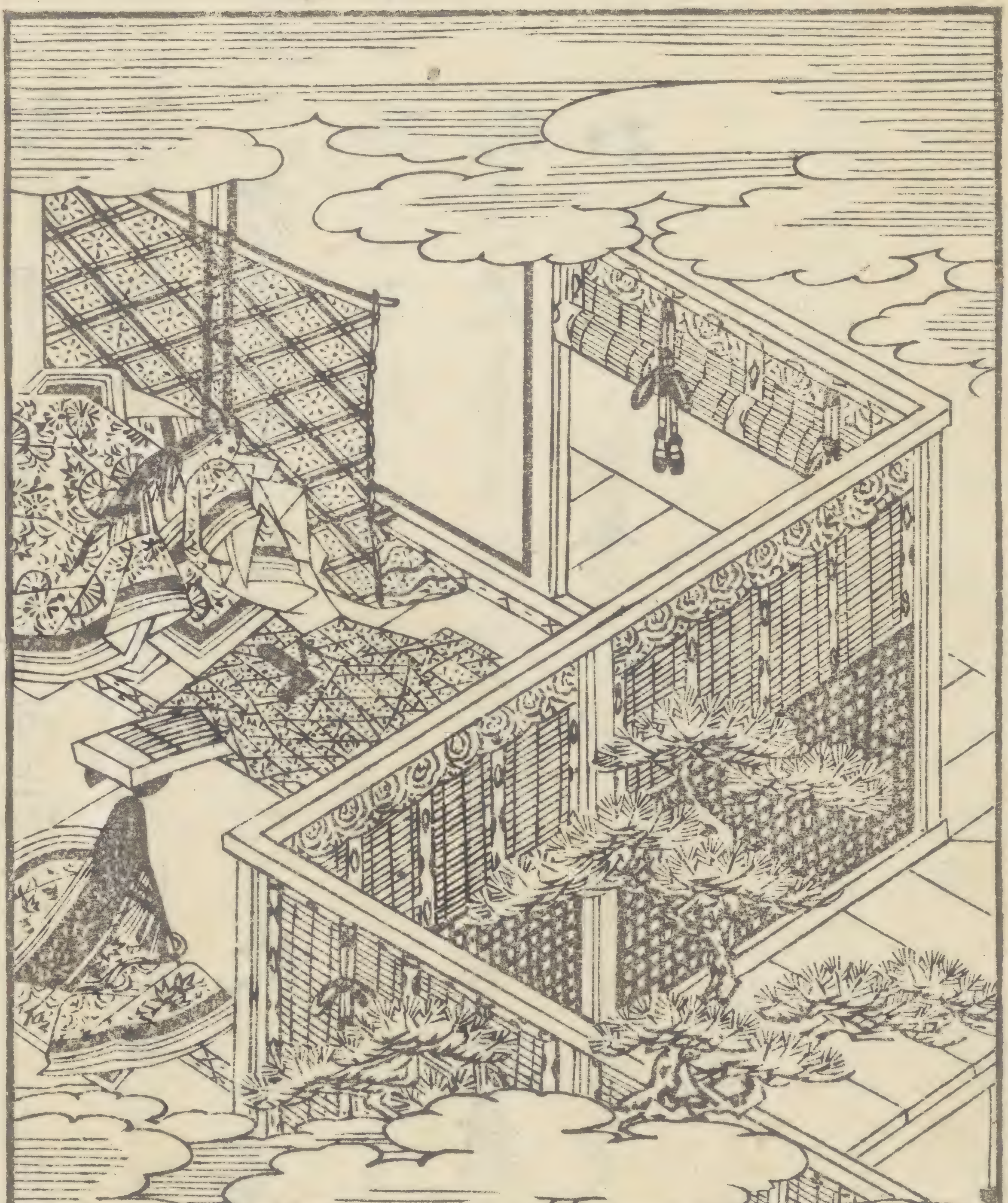
ひさしくあわぬ君有り　あひ見て

明かりありもこ丽よくなわに思わやなれ

以ひやかり数

むかしみかと住吉に行幸し給ひけり
我見ても久しくなりぬ住吉の
きしのひめ松いく世経ぬらん
おほむ神けきやうし給ひて
むつましときみはしらすやみつかきの
ひさしき世よりいはひそめてき
むかしおとこひさしくをともせてわす
るこころもなしまいりこむといへ
りけれは

むかしをふるきあとたりなわぬ世に
たゞぬれのうれしさけもなし
昔よりのあさたるおとこし乃うた見るとてなき
する物とも哉見えて。
わさ見えうてハわさなきこ秋なくハ
れいうてと哉もあつめしとのを



むかしおとこ女のまたよへすとおほえた
る人の御もとにしのひてものきこえ
てのちほとへて

あふみなるつくまのまつりとくせなむ
つれなき人のなへのかすみん

むかしおとこ梅つほより雨にぬれて
人のまかりいつるをみて

うくひすの花をぬふてふかさもかな
ぬるめる人にきせてかへさむ

返し

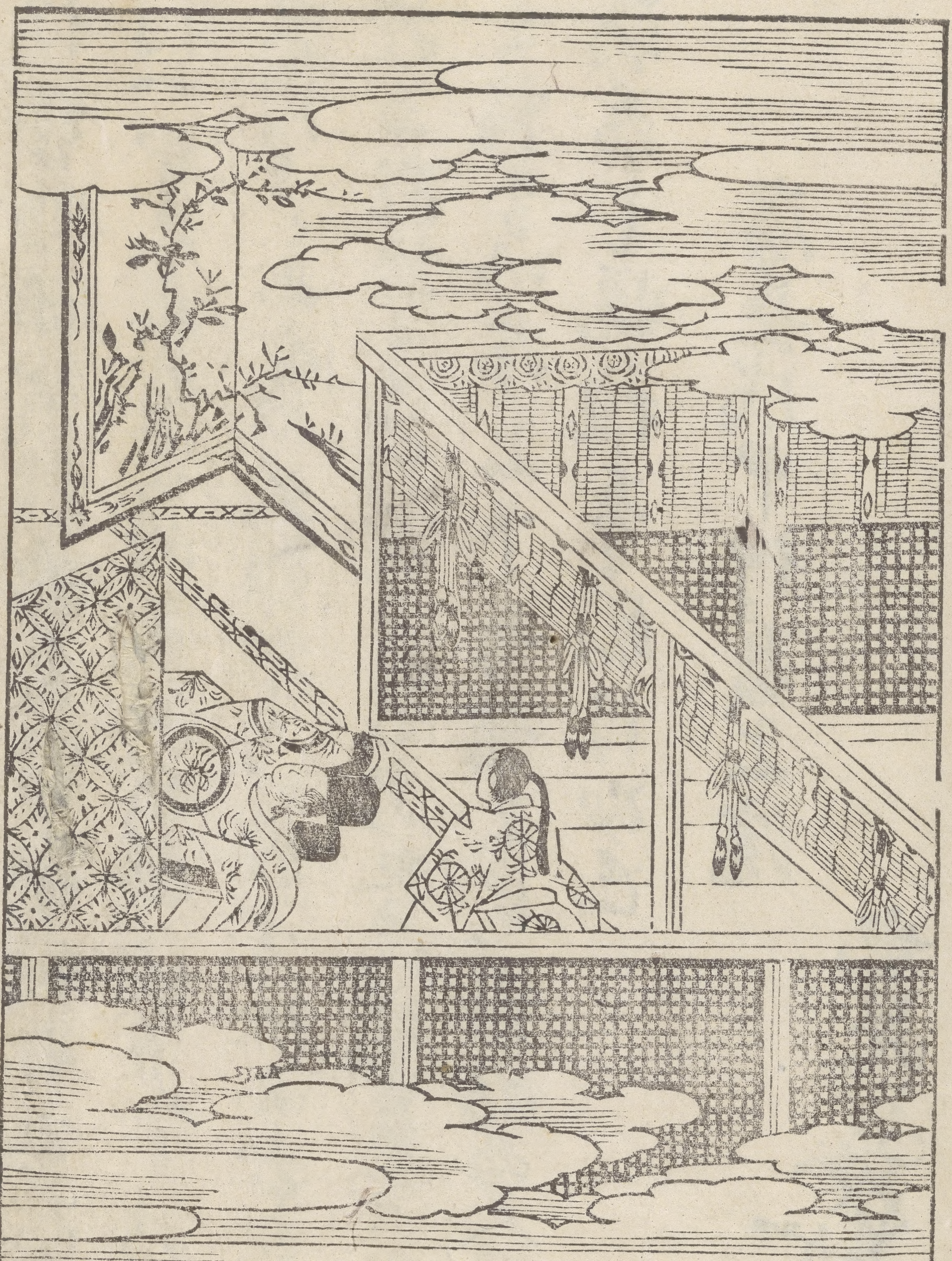
うくひすの花をぬふてふかさはいな
おもひをつけよほしてかへさん

昔男ちきれることあやまれる人に
山しろの井手の玉水手にむすひ
たのみしかひもなき世なりけり
といひやれといらへもせす

昔男ありけりふかくさにすみける女
をやうやうあきかたにや思ひけん

かゝる哥よみける
年をへて住こしさとを出ていなハ
いとゝふかくさ野とやなりなん
女返し
野とならはうつらとなりて啼をらん
かりにたにやハ君ハこさらん
とよめりける哥にめてゝゆかむとおもふ心
なくなりにけり
昔しおとこいかなりける事をおもひ

に風おもわすかよふ限
思ふ事いはてそたゝにやみぬへき
我とひとしき人志なけれハ
萬かとこ見侍らぬ様しぬへきか
わしは神ハ
浅井小ゆく急とはのみてあしかな
暁月光とハかもすきかし誤



伊勢物語新刊就余需勘物摸搨兼据黄
門一本之奥書矣此物語之根源古人之説々
不同也今以天福年所被与孫女本正之
猶為難思者訂授之逓欠也又図畫者中
之趣分以為上下巻雖不足勤好女人情
態為之悦稚童眼目而已

慶長戊申仲夏上澣

也足叟

明治十三年十二月
[illegible]
[illegible]